

## 成田市生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体第5回会議 議事録概要

### 1 開催日時

平成30年3月19日（月） 午後2時から午後4時

### 2 開催場所

成田市役所中会議室

### 3 出席者

（委員）

西田委員、小林委員、佐藤委員、大木（和）委員、西村委員、宮崎委員、渡邊委員、石井委員、大木（み）委員、高橋委員、山根委員、野平委員、北村委員、以上13名（欠席：沓掛委員、小山委員（竹能氏代理出席）以上2名）

（事務局）

高田福祉部長

三橋介護保険課長

加瀬林高齢者福祉課長、平岡係長、越川主査、野口副主査、松村主事

社会福祉協議会地域福祉係武田係長

西部南地域包括支援センター大麻管理者

小野生活支援コーディネーター

### 4 会議次第

#### 1 開会

#### 2 福祉部長あいさつ

#### 3 議題

##### （1）活動報告

- ①千葉市稲毛区の第1層協議体・生活支援コーディネーターの取組について

千葉市生活支援コーディネーター 佐藤キヨ子氏

- ②白井市の第2層協議体・生活支援コーディネーターの取組について

白井市生活支援コーディネーター 仲山君子氏

##### （2）講演

テーマ「地域の支え合いを考える」

講師 国際医療福祉大学 理学療法学科長 西田裕介氏

##### （3）生活支援コーディネーター活動報告及び提案

##### （4）意見交換

#### 4 その他

#### 5 閉会

## ●開会 包括支援係長

委員 15 名中 13 名が出席。会議成立。本日、傍聴者なし。沓掛委員と小山委員が欠席。小山委員に代わりケアマネジャー連絡会から竹能氏が代理出席。

## ●福祉部長挨拶

本協議体の委員の皆さんにもご議論いただき、平成 30 年度から始まる 3 年間の指針である「第 7 期成田市介護保険事業計画」を策定することができた。計画の中で、それぞれ取り組む事業があるが、本協議体で今後も議論を深めていくことになる「生活支援体制整備事業」は、地域包括ケアシステム構築の中心となる部分であり、この協議体が地域の支え合い活動の推進に向け、大きな役割を担っている。

本日は、本協議体の委員長である西田先生から、「地域の支え合いを考える」と題して、ご講演をいただく。協議体の役割や地域での支え合いの必要性について、今一度、理解を深めていただき、それぞれの立場、それぞれの職域において、どのような支援、関わりが必要かを考えていただく時間になればと思っている。また、先進自治体の生活支援コーディネーターとして、千葉市の佐藤キヨ子さん、白井市の仲山君子さんにお越しいただき、千葉市稲毛区及び、白井市の「協議体並びに生活支援コーディネーターの活動の報告」をいただく。支え合い活動を推進する先進的な情報を得て、本市の取り組みに生かしていければと思う。

また、本市の小野生活支援コーディネーターからも、活動報告として、買い物調査アンケートの結果を報告させていただく。今後も、生活支援コーディネーターを中心に、住民の声やニーズの把握を進めていくが、単発の調査や働きかけで終わることなく、貴重な情報を生かし、取り組んでいくために、情報をどう繋げていくのかを協議体で整理していく必要がある。そして、今年度は、高齢者の居場所立ち上げ支援講座を 3 回開催し、多くの市民の方にご参加いただいた。これからも、住民目線で市民の方々と地域の支え合いの創出に向けて、一緒に考える機会を増やしていきたいと考えている。

## ●委員長挨拶

今回が第 5 回ということで、平成 29 年度最後となる。委員皆さんの意見を共有していきたい。来年度はフォーラムの企画、アンケートの実施等、具体的な行動、計画を実施していきたいと考えている。今回は今までのまとめということで、先駆的に活動している 2 市の生活支援コーディネーターから情報提供してもらおうようになっている。2 市と本市の生活支援コーディネーターの情報提供ののちに質疑応答の時間を設けたいと考えている。

## ●佐藤生活支援コーディネーターの報告

千葉市は公募形式で生活支援コーディネーターを募り、稲毛区的生活支援コーディネーターに選ばれた。まず稲毛区について。行政区が6区あり、平成30年1月31日時点での市全体の人口が967,660人、稲毛区の人口が158,085人である。千葉市が進める8つの柱があり、そのひとつに生活支援・介護予防サービスの基盤づくりの推進があり、そこに生活支援コーディネーターが位置付けられている。

コーディネーター及び協議体の配置状況について。千葉市は1層のみの配置であり、協議体は設置されていない。平成30年度より、中央区に第2層が配置されることとなっている。千葉市の高齢化率が区により変動があり、稲毛区は25.56%と、市の平均である25.43%に近い数字である。千葉市では平成27年に各区に1名生活支援コーディネーターが配置された。現在は各区2名となっている。

活動内容の紹介。2015年から活動をしている。活動の1つ目「社会資源の把握と情報提供」について。地域のサロンや、介護予防体操などの集いの場、見守りや家事支援・外出支援などのサービスの調査を行い、サロンはどこにあるのか、何をやっているかといった情報がわかるように、調査した情報を介護事業所・生活関連情報検索システムへ登録した。また、活動場所を地図上で示している「いきいき活動マップ」の作成を行った。また、生活支援サービス活用ガイドの作成を行った。ガイドにはスポンサーがついており、作成の費用はかかっていない。

活動の2つ目「ニーズ調査」について。270～290人くらいの団地でアンケート調査を実施。サロン訪問を通じて住民への聞き取りを行ったり、ケアマネジャーや保健師の地域連携会参加を通じて情報収集を行った。

活動の3つ目「ささえ合い活動の立ち上げ支援」について。稲毛区の地域によっては高齢化40%を超える地域がある。千草台団地でのゴミ出し支援。アンケートをもとに、コープ園生における見守り活動立ち上げ支援。グリーンプラザ園生では、高層マンションで挨拶くらいの関わりしかないことから、ラジオ体操会。体操後お茶をする等、お互いを知れる緩やかな見守り支援。千葉市で養成したシニアリーダーの体操立ち上げ支援・継続支援。

活動4つ目「担い手の創出」について。認知症サポーター養成講座参加者の中から担い手を創出したり、VAIC-CCIが行っている企画（麻雀や男の料理）の参加者からの担い手創出。コープ園生で高齢者を支える会としてささえ愛の会があり、そこから担い手の創出をしている。

活動の5つ目「ネットワークづくり」について。コープ園生での地域ケア会議参加、他職種連携会議への参加、「地域の力を未来につなぐIN稲毛」を主催し、立ち上げをどうすればわからないような人達に向け、実際に立ち上げをしている人の話を聞ける機会を設けた。

稲毛区の課題として、急速高齢化が進んでいる地域がある。高齢化により買

い物に不便な地域がある。既存の支え合い活動の担い手不足。といったものが挙げられる。

来年度の取り組みとして、ささえあいワークショップの開催、活動の継続支援、活動立ち上げ支援、生活クラブ風の村安心システム（買い物バスの運行）がある。社協とあんしんセンターとの連携により稲毛区で 2 か所予定されている。

実際の活動内容を写真で紹介。

小さな単位で粘り強く行っていくことが大事。そこからニーズを引き出す。

### ●仲山生活支援コーディネーターの報告

白井市について。人口 63,774 人と比較的少ない人口。昭和 39 年に白井村から白井町になり、昭和 54 年印千葉ニュータウンの入居を開始したことで、人口が一気に増えた。昭和 55 年の人口伸び率は日本一だった。また、平成 22 年においても人口伸び率が千葉県一であった。人口が急に増えたため、旧地区とニュータウン地区がきれいに分かれることとなった。A 圏域と B 圏域に分かれていて、日常生活圏域の 3 万人ずつ。旧地区である A 圏域は面積が広いが人口が少ない。昭和 50 年代に移り住んだ人たちが高齢となり、高齢化は国のスピードを超えていて、平成 27 年において後期高齢者人口は 5,150 人であり、平成 37 年にはおよそ倍の 10,500 人と推計されている。

こういった現状から白井市では早くから対策に取り組む。平成 24 年に地域包括支援センターが地域連携会議の開催を高齢化率 1.2 位を争う地区を対象に行った。最初は、年 2 回の大きな会議を実施すればいいと始めたが、住民からそんな会議をしても何も生まれないという意見があり、平成 25 年にふれあい会議の前身である地域ぐるみネットワーク会議、中心メンバー会議を実施した。これがふれあい会議の前身になっていくのだが、その後、週 2 回開催する「なしの実広場」というサロンや、「しろい高齢者みまもりネット」ということで、企業さんの方で、新聞配達や集金の際など、ゆるやかな見守りをしていくということで、地域ぐるみネットワークが開始された。また、平成 26 年には、地域ぐるみネットワークふれあい会議の対象地区を全小学校地区に拡大し、平成 28 年 9 月から生活支援・介護予防サービス体制整備業務が開始し、白井市社会福祉協議会が受託して生活支援コーディネーターが設置された。生活支援コーディネーターの紹介は、「社協しろい」の広報誌を活用。第 1 層はこれまでに 3 回の会議を実施し、第 2 層は、5 つの小学校区がある A 圏域、4 つの小学校区がある B 圏域をそれぞれに、私が社協職員と兼務で、非常勤職員 1 名と一緒に担当している。A 圏域の取組は、第一小学校区は、旧住民と新住民の交流が少ない、集まる場所もないということで、企業とコラボして、地域の活性化を図ってこう。第二小学校区は、問題がない地区でもあり、地域で活躍できる人を探してこうと活動を始めたところ。南山小学校区は、エレベーターのない団地が

多く買い物に不便なので、買い物支援を考えていく。池の上小学校区、桜台小学校区は交流が少ないので、一人暮らしになった時に見守りが必要になってくるので、取組を始めたところである。B 圏域は、第三小学校区は、一人暮らしや生活困窮が一番多い地区となっており、高齢者というよりは、多世代交流を考えている。清水口小学校区は、高齢化率が高いということで、巡回型のサロンをやっていこうということになった。七次台小学校区は、店舗が少ないということで、何をやるかと考えたが、地区社協の活動が活発なので一緒に考えていこうということになっている。続いて、ふれあい会議について。毎月開催をしている。参加者は、地域の住民、介護事業所、包括職員、社協職員など。清水口小学校区は、歩いて行けるとところにサロンをということで、あいのねサロンという巡回型のサロンを実施した。七次台は、お店が少ないため買い物支援の在り方を考える。第三小学校区は、世帯としての支援が必要ということで、子ども食堂などの直接的な支援を考えている。大山口小学校区は、地区社協、PTA などいろいろなところが入っていて、行政と連携してまちづくり協議会の設立を、来年度、モデル地区としてやっていく。地域ぐるみネットワーク会議と連携してやっていくことになっている。

ふれあい会議、あいのねサロン、おやじサロン等の実際の活動内容、様子を写真で紹介。

今後の課題としては、地域に夢を描いて、夢の実現のために、地域の皆さんと一緒に、明るく、笑顔で、楽しく進んでいくこととしている。会議の方に参加してくれる方が少なくなっているところ。みんなが集まったところが、ふれあい会議とすることにした。待っているだけでは進まない。

#### ●西田委員長の講演

地域の支えあいを考えるというところで、具体的な情報は先ほど生活支援コーディネーターのお二方より提供があった。国の施策は入ってくるが、自分自身に焦点を当てて考えるとどうなのか、ということから、「大きな枠組みではあるが、健康とは」について考えてみたいと思う。「～ができないからそれを補うためにこれやる」だと医療の現場では、対処療法で、咳が出る、くしゃみがでるといった場合、その原因は何なのか。歩けない方、歩けない原因は何なのかを専門家は考える必要がある。そもそも状況をどう把握した上で、どう対応していくのか。対処療法では限界があり、考えていきたい。

成田市の生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体（第 1 層）設置要綱第 1 条には「生活支援サービス及び介護予防サービスの体制整備に向けて」と書かれており、できていないことが前提にあるからやらなければならないということだと思うが、できていないからやるのではなく、なぜできていないのか、できることによってどう変わっていくのかが大事。第 2 条では「生活支援サービス及び介護予防サービスの体制整備について情報共有、連携強化を行うこと」

とある。これがなぜ生活支援サービスが必要なのか、整備され充実するとどうなるのか、考えていく場が必要なのではないか。介護予防サービスが充実すると「生き生きとした生活に繋がる」「健康に繋がる」ことになる。そもそも、生き生きとした生活とは、健康な生活とは何だろう、ということを経験し、考えていく必要がある、これを考える場が第1層から第3層であり、役割が違って、我々が第1層市町村レベルで考えているところ。だが、第1層、第2層は根幹を共有しないと活動がバラバラになる恐れがある。専門職は自己満足で終わってしまうこともある。そうではなく、何を効果判定で良しとするか、何を見ていくときちんと結果が分かってくるのかを考えていく必要がある。そう考えると健康という捉え方は間違っていないと思う。

地域包括の図、大枠すぎて捉えきれない。この中にもさらに細かい。最終的に包括と言ってしまうとまとまってしまう。個人差があり、人それぞれ違う。ひとつひとつを見ることが必要だし、大枠を見ることも必要で、そのバランスが大事。現在は大枠すぎる。全体が大事という風潮があるが、一つ一つが見れていなければ全体は見られない。バランスを考えていく時期かと思う。そうしなければ本質には辿り着いていけない。

地域の支え合いについて。なりたいきいき百歳体操の場、買い物支援、どういう意義があるのか、何のためにあるのか、何のために必要なのか、活動することによって、どのように解決していくのか。少しずつ考えていかなければいけない。

生活の定義は、いろいろあると思うが、生命の維持を図る営みや活動のすべてであり、環境が生活を支えることもできるし、脅かすこともある。百歳体操で居場所づくりをやろう、買い物支援で不便を解消しよう、その人の生活を支えているのかどうか、そこの判断が必要になる。それをまとめると生活環境になる。構成要素はシンプルで「人・物・事」である。人は、自分と他人、物は、生活財等の物の有無や多少、事は、家庭・地域・社会・自然。それをどう捉えどう変えていくのか。この生活環境に第1層の協議体はどう参画しているのか。何を変えようとしているのか。何のために協議体があるのか。シンプルにどこかに落とししていけばストーリーが作れるのかと思っている。百歳体操や買い物調査に最終的に着地できればと思う。もの、人、空間の関係では、それぞれが勿論促進因子にもなるし、疎外因子にもなり得る。バランスよくが大事である。

ここから、話は変わってくる。日頃どれくらい運動をしているか、健康とは何か？歩数をなぜ伸ばすのか。人生100年をどう生きていくのかに繋がる。

体力=健康と捉えがちだが、体力筋力アップ国語辞典にはからだの運動能力・抵抗力・耐久力などの総合的な力。専門的には非常に細かく分類される。行動・体力・防衛体力・免疫力、風邪を引かない力、精神的活動能力、年を重ねるにつれ向上する。歳をとると体力が落ちるだけではない。一概に言ってもいろいろある。寝た後も身体活動。身体活動と病気にならない力は相関している。身

体活動量が多ければ多いほど、病気にならないことは科学的に証明されている。買い物に毎日出かけている人のほうが活動量は多くなる。病気に勝つ身体になっていく。体力がアップ。だからいきいきと生活できる。場と環境がいきいきとした生活に繋がる。

健康寿命を最も阻害する病気。日本人の脳卒中を、生活習慣病をどうコントロールするか。10年以内に脳卒中が再発する割合は50%。1回病気になってしまった人は死ぬまで不健康なのかという視点はとても大事。片麻痺の人も新しい生活をつくっていかなければならない。そのあとの生活をどうしていくか。メタボリックシンドローム死の四重奏。ドミノ倒しのように倒れていくのがメタボリックドミノの概念。我々は生活習慣の乱れドミノをどこで止めるか、どうやって起こすか、倒れ方を逸らすにはどうすればいいのか。例えば第1層を入れた場合、百歳体操がどう活用できるか、買い物支援がどうコントロールできるか。

高齢者2030年には7世帯に1世帯。これは、2009年の時に言われているので、もっと早くなるかもしれない。かつてのような関係性は難しい。だったら新しい発想で。WHOの定義を確認。個人的には、ケアシステムではなく、健康システムの方が良いと思う。絶対に忘れてはいけないのは、本人の選択を尊重すること。こちらの押し付けになっていないか。その人らしい生活になっているかどうか。運営側の価値観になっていないか。社会の中での位置づけやそれぞれのバランスが大事である。ここで、色々な活動をしている団体の話し合いが、今後の取り組みに生きてくる。

#### ●生活支援コーディネーター活動報告と今後の活動、提案（小野生活支援コーディネーター）

スーパーでの出口調査報告について。プレテストのように行った。単に買うだけでなく介護予防の観点からを目的に、1つ目、お買い物の困りごとは何か。2つ目、意識を聞き介護予防との関連性を探る。3つ目、集団での買い物支援の必要性を探る。4つ目、利用しやすい集団での買い物支援のポイントを探る。スーパーに買い物に来ている高齢者とその家族。出口で聞き取り。成田市の生活支援コーディネーター1人と富里市の4人の生活支援コーディネーター、地域包括支援センター職員で行った。8つのスーパーで各2日間行った。441名のアンケートについて説明。今回の調査では60%の方が高齢者世帯または独居の方であった。

来年度の全市的な買い物調査に向けて、協議体の中で買物部会を作り、来年度の調査に取り組んでいきたいと考える。西村委員、大木（和）委員、山根委員が買物部会に参画の意向。

#### ●委員

買い物調査についてはこれから詰めていく。この場では手を挙げにくい人もいるかもしれないし、他の委員の方にも今後協力してもらおうことが出てくるかと思う。何か聞きたいことはないか。

●生活支援コーディネーター

アンケート調査から結果として見えているものがたくさんあるかと思う。具体的な活動ができればいいのではないかと思う。

●生活支援コーディネーター

白井市では月 2 回の買い物支援をしている。「行きたいと思ったときに行く」という気持ちは強い。成田市のアンケートは参考になるところがあった。

●委員

今回のアンケートは買い物に行けている人が対象になっていることにも注意する必要がある。移動販売だと小さなコミュニティになり、出ていかなくなってしまう可能性もある。

●委員

佐藤生活支援コーディネーターへ伺いたい。民児協の連絡会の会長をやっている。民児協 10 地区ある。地域特性として聞いていただきたいが、生活支援コーディネーターをしている方、事業者という形で 5 頁に表示されているが、我々は民生委員と民児協と社協との間で、このようなことをやっている。法人の方が入ってこない、もう、地域によってはこういうことは進まないという時代がきているのか。

●生活支援コーディネーター

柏市は社会福祉協議会に委託して、支援員を養成している。千葉市の考え方として、多彩な事業所に参加してもらい、いろいろ特徴をもっている NPO、株式会社、社会福祉協議会などの事業所が生活支援コーディネーターを担うことで、お互いが持っているものを切磋琢磨しながら地域の中に入ってほしい、といったことで公募し採択してきた経過がある。

●委員

専門的な分野で人材が行ったほうが効率的で理想的なところに近づいていくということか。

●生活支援コーディネーター

そうでない。地域それぞれ違いがあり、生活支援コーディネーターは、株



式会社であったり、NPO であったりしても、地域の中に入った時にそれぞれ持っているものを住民と話しながら作り上げていくことが必要である。

●委員

行政の新しい考え方や指導力が必要になるのか。

●生活支援コーディネーター

行政というよりは、千葉市はまだできていないが協議体の力が必要になってくると考えている。

●委員

委員の皆様には、今回出た意見や情報を各所属団体に持ち帰ってほしい。一緒に考え、解決策を進めていきたい。

○高齢者福祉課長

体制の見直し。第7期では第2層の配置、包括増設。2課で行っていたものを再構成し、事業見直しを図る。地域包括ケアは介護保険課へ移行。高齢者福祉課に事業所指導係を設け、事業所の指定等を高齢者福祉課に一元化する。

次回開催

平成30年5月頃